



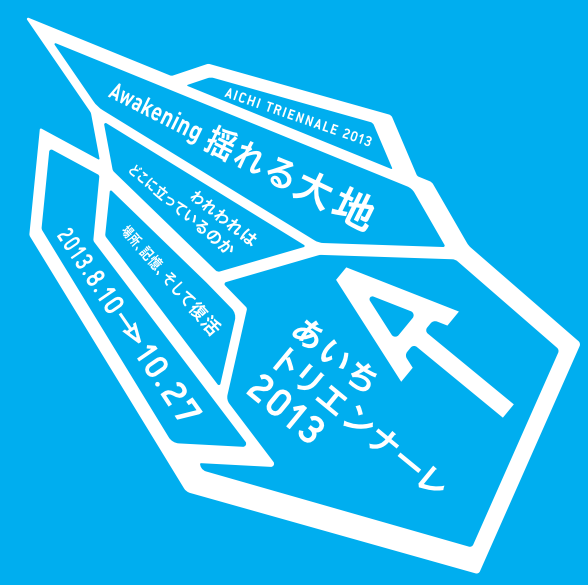
都市を覚醒せよ 世界のアートが共振
Rising Cities: The festival that resonates with the

ヤノベケンジ《サン・チャイルド No.2》

あいち トリエンナーレ 2013 ダイジェスト

AICHI TRIENNALE 2013 DIGEST

2016年、未来をその手に……



オノ・ヨーコ《生きる喜び》と名古屋テレビ塔 撮影：あいつり写真部

アートが未来を拓く

2013年8月～10月、「あいちトリエンナーレ2013」が開催された。あいちトリエンナーレとは、3年に1度、愛知で行われる国内最大規模の国際的な現代アートの祭典。愛知の文化芸術百年の軸をつくる総合戦略として、世界に向けて新たな芸術を創造・発信していくことにより、世界の文化芸術の発展に貢献するとともに、クリエイティブな人材の集積・知の集積をもたらすものだ。そのことが愛知の文化力の飛躍的な向上、さらには産業力・経済力を含めた総合力の成長へと繋がり、日本を牽引し、世界と闘える地域づくりに寄与していく。

現代美術を中心として、ダンス・演劇などのパフォーマンスやオペラを同時展開。さらに、まちなかでの作品展示やキッズトリエンナーレなどがあることも、あいちトリエンナーレの大きな特色だ。2010年の初回に続く今回は、「揺れる大地一われわれはどこに立っているのか：場所、記憶、そして復活」をテーマに、世界34の国と地域から122組のアーティストが参加。名古屋市内と岡崎市内の総計3ヘクタール以上にも及ぶ会場で展示や公演を行ったほか、県内4か所を巡回して作品展示する「モバイル・トリエンナーレ」も実施した。

総来場者数は、前回は上回る約62万6千人。多くの方々に世界最先端の現代アートの魅力や迫力、多様性や奥深さを伝えた。今回のトリエンナーレの経済波及効果は69億円。パブリシティ効果も55億円以上にのぼった。アンケートでも、84%の来場者が「次回のトリエンナーレにまた来たい」と回答。中学生以下の子どもたちは、91%が「楽しかった」と回答しており、多くの方々が次回のトリエンナーレを楽しみにしている。

あいちトリエンナーレ2013では、東日本大震災を含め、世界各地で起きている社会の変動を意識し、アートの力を社会に問いかけた。あいちトリエンナーレは、常に新たな視点で、先端的な芸術と社会や時代との関わりを提示しつづけていく。愛知から世界へ。アートが未来を切り拓く。

ヤノベケンジ（太陽の結婚式） 撮影：怡土鉄夫

Contents

- 06 | 記憶、そして復活
- 08 | アートと建築の親密度
- 10 | 命のサイクル
- 12 | アートを通じて社会を考える
- 14 | 街の見え方が変わる
- 16 | ジャンルの融合
- 18 | アートを体感する
- 20 | 人の輪の広がり
- 21 | メディアが追いかけたトリエンナーレ
- 22 | 主要データ一覧



名和晃平《フォーム》 撮影：表 恒匡 | SANDWICH



オープニングレセプションより 撮影：秦 義之

あいちトリエンナーレ2013

テーマ：揺れる大地 — われわれはどこに立っているのか？
場所、記憶、そして復活
Awakening - Where Are We Standing? -
Earth, Memory and Resurrection

会期：2013年8月10日(土)～10月27日(日)《79日間》

会場：[名古屋地区]愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、
長者町会場、納屋橋会場、中央広小路ビル、オアシス21、
名古屋テレビ塔、若宮大通公園など
[岡崎地区]東岡崎駅会場、康生会場、松本町会場

芸術監督：五十嵐太郎(東北大学大学院工学研究科教授<都市・建築学>)

主催：あいちトリエンナーレ実行委員会



記憶、そして復活

アート力は、時に、この世界で起きた出来事を人々の記憶に焼きつけることができる。それは事実を客観的に伝える報道とは異なり、アーティスト自身が主観をもって発信しながらも、鑑賞者それぞれが自由に受け止めることのできるメディアなのだ。

あいちトリエンナーレ2013では、国内外のアーティストたちが、東日本大震災という

未曾有の出来事にも真正面から向き合った。震災を題材に発表された数々の作品は、鑑賞者によって様々に受け止められただろう。きっと彼らは、それぞれが自由に考え、想像したはず。それこそが復活の第一歩だ。

TVドラマ「あまちゃん」の音楽でも話題を集めたミュージシャン・大友良英の総合ディレクションによるプロジェクトFUKUSHIMA!は、大友自身を含む福島ゆかりのアーティストたちが立ち上げた企画。起きたことを忘れないために、より多くの人々と復活のエネルギーを分かち合うために、彼らはオアシス21で演奏し、歌い、踊った。もはや祈りにも似た切実な想いと、我を忘れて音楽の輪に身を投じてみる快感。その場に居合わせた通行人までが、オリジナルの盆踊りに参加したことにも、アート本来の力を感ぜさせた。



プロジェクトFUKUSHIMA! (総合ディレクション：大友良英) 「フェスティバルFUKUSHIMA in AICHI!」 撮影：羽鳥直志



撮影：羽鳥直志



彦坂尚嘉「復活の塔」
写真は、南相馬市鹿島区の仮設住宅に暮らす小高区住民が鑑賞している様子
建築との交流プロジェクトでも経験豊かな彦坂尚嘉は、震災後は福島県南相馬の仮設住宅地計画に参加している。今回は南相馬での活動も踏まえ、被災者の和歌93首の書かれたヒノキ材から成る「復活の塔」を発表。9月には、和歌を寄せた仮設住宅の人々を招いて同作と対面してもらう機会も設け、震災の記憶が風化しつつある現状に一石を投じることとなった。



リアス・アーク美術館 展示風景

宮城県気仙沼のリアス・アーク美術館が参加。被災記録を特別業務として行ってきた同館は、2013年から常設展示する「東日本大震災の記録と津波の災害史」の一部を今回公開した。被災地の写真で構成される展示には、学芸員が創意を凝らしたキャプションも。説明ではなく、方言も用いて風景や物を語った言葉に、来場者もリアルな状況を想い、震えた。



志賀理江子「螺旋海岸」

岡崎出身の志賀理江子は、現在の活動拠点・宮城で撮った作品群を携えて故郷・岡崎に凱旋。仙台で行った個展「螺旋海岸」での発表内容をベースに、245点に及ぶ写真作品をショッピングセンターのシビコに再構成した。ひんやりと無機質な空間に浮かび上がる、志賀作品の闇と独特の発光は、生のエネルギーを渦巻かせつつ、どこか厳肅な空気も漂わせた。



平川祐樹「Missing River」 撮影：平川祐樹

岡崎で、矢作川と人々の関係取材した平川祐樹。東邦ガスの旧連尺ショールームを使った展示空間はわずかな光のみで、目を凝らすと、宙吊りの小舟がぼんやりと……! これは、かつて流域の家に備えられていた「上げ舟」と呼ばれる避難用の小舟が、天井に収納されていた様子を表現している。平川は、かつての自然災害の記憶を呼び覚ました。

アートと建築の 親密度

あいちトリエンナーレ2013では、都市・建築学を専門とする五十嵐太郎を芸術監督に迎え、建築の視点を取り入れたことも特徴となった。愛知には歴史的建造物・名建築が多く残っており、それらを生かした作品は2010年開催時にもあったが、今回はアートと建築を架橋するアーティストが多数参加。より本質的に両者の親密度を証明した。

中でも輝きを放ったのは、栗原健太郎と岩月美穂のユニットstudio velocityだろう。岡崎を拠点とする彼らが地元ショッピングセンターのシビコ屋上で展開したインス

タレーション《Roof》は、晴天の日は、外に出た途端にホワイアウトするほどのまぶしさ! 約3500㎡の屋上を白く塗ったために激しい日差しの照り返しが起き、これが、劇的な効果を生んだ。そして頭上をよくよく見ると、細い糸の存在が……。ポリエステル糸を格子状に張り巡らせたコレこそRoof=屋根。空を背景にしたその屋根は、まるで無限の広がりを感じさせた。栗原と岩月の壮大な建築観は、まさに“天晴れ”のひとつと言。

また、一緒に展示した《瞬間を閉じ込める椅子》は、東北で採取した植物と透明樹脂で制作されている。建築から派生して家具にも心を配ると同時に、東北にも想いを馳せたふたりの温かみや優しさが、真っ白な空間にそっと色を添えた。



studio velocity / 栗原健太郎+岩月美穂 《Roof》 撮影：栗原健太郎



青木 淳 杉戸 洋(スパイダース)《赤と青の線》 撮影：杉戸 洋

ルイ・ヴィトン名古屋栄店の設計でも有名な青木淳と名古屋出身のペインター・杉戸洋が「スパイダース」のユニット名を掲げ、亡き建築家・黒川紀章の設計による名古屋美術館の読み換えを企てた。題して《赤と青の線》では、裏手の通用扉を入り口に仕立て、私たちが見知った動線をかく乱!? 鑑賞者は複雑な通路や階段を抜けながら、全身で作品を体感できた。



打開連合設計事務所《長者町ブループリント》 撮影：怡土鉄夫

地下鉄の駅とも直結する伏見地下街では、台湾の気鋭・劉國滄率いる打開連合設計事務所が代表作・ブループリントの愛知版を発表。昭和を漂わせる雰囲気の中、床、壁、ショーウィンドウを利用して立体に見える作品を作り上げ、行き交う人々を驚かせた。また、地下街への降り口も、時空を超えたゲートさながらに演出。リノベーションの発想を大きく広げて見せた。



藤森照信《空飛ぶ泥舟》

藤森照信の《空飛ぶ泥舟》は、宙に浮かぶ茶室という突飛な発想で大人気だった作品。時間制限を設けるほど予約殺到。同時に入室した見知らぬ者同士が席を譲り合い、時に写真を撮り合ったりも。なお、茶室を支える柱は子どもたちが参加したワークショップで鉄の支柱に杉皮を巻いて作られたもの。同作は現実の強度を持ちながら、建築にもある遊び心を示した。



オープンアーキテクチャーの様子

普段は公開されていない施設や住居にも優れた建築物は多い。そこで、個人個人では見学が難しい建物をゆかりの人に案内してもらおう企画がオープンアーキテクチャーだ。例えば、写真は今回の出品作家でもある宮本佳明の設計した「bird house」。30度ほど傾斜があり、ふたつの道路が交差している敷地に、木々などの自然と共存する形で建てられた住居には、斬新さと安らぎも共存している。

命のサイクル

ピアニストであり、ビジュアルアートでも才気を見せる向井山朋子は「不条理は人生に関わるすべて。この世に〈生と死〉の問題に関わらないものなんてあるだろうか」と言った。

2013年は、不条理演劇の金字塔「ゴドーを待ちながら」誕生60年の節目と重なったこともあり、パフォーマンスでは作者サミュエル・ベケットを題材にした舞台が続々と。向井山も舞台美術家・照明デザイナーのジャン・カルマンとともに、ベケットの作品に着想を得て「FALLING」を発表した。東日本大震災に想いを寄せた同作は、床を埋め尽くす古新聞の海に10台以上の壊れたピアノが点在。そこに鮮烈な照明が絡むインスタレーションだ。さながら墓地の

ような空間にはピアノが響き、徐々に大きな波音が……。やがて切なくも優しいピアノの調べが流れ、鑑賞者は平穏を取り戻すと同時に、鎮魂の念も深くするのだった。

向井山とカルマンは過去を直視しながら、未来に向けて強いメッセージを放った。どんな辛く悲しいことも、我々は乗り越え、命をつないでいかなければ——。週末には演技指導を受けたボランティアによるパフォーマンスも行われ、未来へのいっそう切実な想いが託された。

ちなみに、古新聞は地元新聞各社の協力によって準備。ピアノはヤマハからご提供いただいた。こうして、いわば“モノの命”も循環させることができたのだ。



向井山朋子+ジャン・カルマン「FALLING」



青野文昭《なおよす・代用・合体・侵入・連置（震災後東松島で収集した車の復元）2013》

仙台を拠点とする青野文昭は、「なおよす」と称し、海岸の漂着物など壊れたモノを扱ってきた。ただしモノは正確に復元されず、新たな形となってアートの命を宿す。青野は90年代から同シリーズに取り組むが、震災以降、別の意味合いを帯び始めたのは皮肉なことか、それともアートの予言性か。知っているモノ同士が混在する作品を、不思議そうに見つめる子どもたちの姿も胸に残る。



ゲッラ・デ・ラ・パス《シークレット・ガーデン》

キューバ出身、マイアミを拠点とするアライン・ゲッラとネラルド・デ・ラ・パスのユニットは、棄てられたもの、特に古着をモチーフとしてきた。マイアミには中古品ビジネスが盛んな地域があり、岡崎と類似している。そこで彼らは古衣類から成る《シークレット・ガーデン》を名鉄東岡崎駅ビルで発表。「リイカーネーション＝再生」を意識した同作には、名古屋城や岡崎城のイメージも投影されている。



ソン・ドン《貧者の智慧：借権園》 撮影：あいつり写真部

中国のソン・ドンは《貧者の智慧》シリーズを通じて「貧しき者がどうやって空間や権利を獲得するか」というテーマに向き合い、古い家具や使われていない建物のパーツをモチーフとしてきた。《貧者の智慧：借権園》では、空間や通行に対する借用の権利を考察。鑑賞者は作品に登って展示スペースを横断することで、どこか落ち着かない、奇妙な感覚を覚えた。



ジェコ・シオンボ「Terima Kos(Room Exit)」 撮影：羽鳥直志

インドネシア生まれの舞踏家ジェコ・シオンボ率いるカンパニーは、このトリエンナーレを機に初来日。バブアの文化的背景を下地にした舞踊にヒップホップを合わせ、独創的な「アニマル・ポップ」というスタイルのダンスを披露した。腰の低いポジションはアジア人にはなじみ深い半面、激しい振付が斬新！時の巡りとともに向上していく「伝統のスパイラル」を痛感させられた。

アートを通じて 社会を考える

アートは多くの場面で、社会問題への注意喚起という役割を果たす。それらは報道と異なり、想像や仮説、提案といった要素もはらんで提示されるものだろう。だからこそ、事実だけでなく、真実を追求するヒントになるのでは？

兵庫の建築家・宮本佳明は、阪神淡路大震災で全壊判定を受けた実家を修復・補強し、「ゼンカイ」ハウスとして甦らせ、注目を集めた。1996年ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展では被災地の瓦礫を展示。金獅子賞を受賞している。そんな宮本は、東日本大震災後の動きも早かった。すぐ被災地に入ると復興支援活動に協力。一方、福島第一原発の上に和風屋根をのせ、荒ぶる放射能を鎮める《福島第一原発神社》にすることを提案。容易に取り壊せない建造物と地域住民はどう共存していくのか、真剣かつ現実的な方法を進言した。

実際のトリエンナーレで宮本は、《福島第一原発神社》の模型を展示。また、同原発が愛知芸術文化センターに収まるサイズであることから、センターの床や壁、天井にテープを貼り、実物大で図面を記す大プロジェクトも展開した。TVや新聞で見た原子炉建屋を、身近に、肌で感じる不気味な体験。アートはいつでも自由な発想を武器に、鑑賞者に当事者意識を目覚めさせ、どんな問題も遠い世界のことにさせない力を持つのだ。



《福島第一さかえ原発》制作風景 撮影：あいとり写真部



《福島第一原発神社》 撮影：怡土鉄夫



宮本佳明《福島第一さかえ原発》 撮影：怡土鉄夫



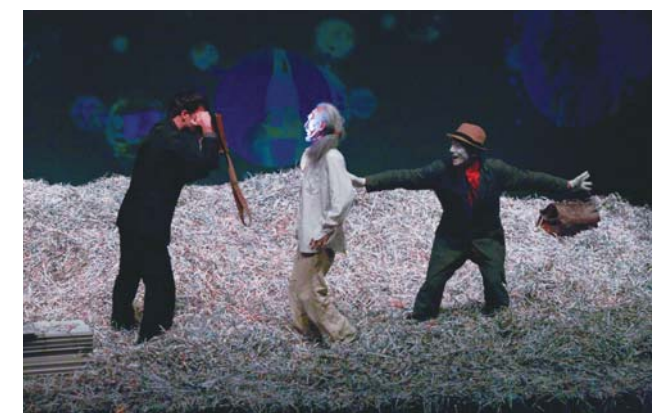
ダン・ベルジョヴスキ《ザ・トップ・ドローイング》 撮影：怡土鉄夫

ルーマニアを拠点に活動するダン・ベルジョヴスキの《ザ・トップ・ドローイング》は、愛知芸術文化センター11階・展望回廊の窓を使って大掛かりに展開。わかりやすい英語や絵を使った表現は、老若男女を楽しませた。しかし、そこには日本、愛知に来て感じたことを含め、世界でも共通する現代社会への鋭い批評がシニカルに浮かび上がっていたのだ。



アルフレッド・ジャー《生まれめんな（栗原貞子と石巻市の子どもたちに捧ぐ）》 撮影：福岡 栄

チリ出身のアルフレッド・ジャーは、映像や建築を通じて社会の不平等に光を当ててきた。彼は東北を回り、石巻で学校を失った子どもたちのことを知った。黒板とチョークが並ぶ新作は、彼らが過ごした時間と未来を思い描いてもらうためのもの。浮かび上がる原爆詩人・栗原貞子の言葉「生まれめんな」は、時を経て再び困難に直面した日本全体へのメッセージのようにも映る。



藤本隆行+白井 剛「Node / 砂漠の老人」 撮影：羽鳥直志

いち早く世界が認めたアーティスト集団「ダムタイプ」の照明デザイナー及びディレクターの藤本隆行と、コンテンポラリーダンス界の気鋭・白井剛を中心とするプロダクションが、震災後の世界を寓意的に表現した「Node / 砂漠の老人」劇場版を本邦初演。70歳を超えた舞踏家・吉本大輔の身体が痛々しいまでに躍動、過酷化する未来の環境を想像させた。



ままごと「日本の大人」 撮影：羽鳥直志

一宮出身、東京で劇団「ままごと」を率いる柴幸男がトリエンナーレ委嘱作「日本の大人」を発表。判然とはさせられない子どもと大人の境界をテーマに、小学26年生(!)の男と出会った子どもたちの幻想的な物語が展開された。子どもも大人も一緒に鑑賞できる演劇を目指した同作。笑ったり哀しくなったり、タイミングはそれぞれでも同じ時間・空間を分かち合うことに成功した。

街の見え方が変わる



高橋匡太《Grow with City Project》 撮影：あいり写真部

アートが街と密接に関わることで、見慣れた風景がガラリと変わってしまうこともある。今回は、名古屋の長者町や納屋橋に加えて、岡崎の松本町や康生などの主要会場も増え、愛知全体でのお祭感もアップした。

さらに、会場に全く縛られず繰り広げられたプロジェクトもある。様々な光を扱うアーティスト・高橋匡太のインスタレーション《Grow with City Project》では、一般参加者を募り、白川公園・名古屋市科学館から長者町アーケード、オアシス21を通して愛知芸術文化センターまで、提灯を持って

練り歩き！ しかも、その数なんと1000人！！建築物をライトアップする光とシンクロして、様々な色に発光する提灯行列は、ひと時、街を変貌させた。

もちろん街とは、そこに暮らす人、働く人、あるいは行き交う人、通りがかっただけの人さえ含むものだろう。街の見え方が変われば、人の見え方も変わる。実際、高橋も街に介入するだけでなく、多くの人を巻き込んでアートを成立させた。どんな形であれ、アートに触れた後の街や人は、それまでとちょっと違う道を歩み始めるかもしれない。



撮影：怡土鉄夫



Nadegata Instant Party (中崎 透+山城大督+野田智子) 《STUDIO TUBE》映像制作風景 撮影：城戸保

中部電力・本町開閉所跡地を舞台に、架空の特撮スタジオ“STUDIO TUBE”を出現させたNadegata Instant Party。公募で集まったスタジオ・クルーとともに「かつて多くの特撮を行ってきたスタジオが閉鎖することに決まった」という“口実”を作り上げ、作品を展開した。街の人を巻き込んでの撮影、架空と現実が入り交じる不思議な空間。制作された映像のラストシーンには泣き笑いの感動があった。



青木野枝《ふりそそぐもの／旧あざみ美容室》

鉄をモチーフにしながら、どこか浮遊感のある作品を発表してきた青木野枝は、これまでも各地のまちなかで展示経験を持つ。今回は、お寺の境内とつながる松本町会場の旧あざみ美容室に、循環する水の姿を表現した作品《ふりそそぐもの》を発表した。今はもう閉店して朽ちかけた店と軽やかな鉄のオブジェは、場所の記憶と作品との不思議な一体感を感じさせた。



横山裕一《あいちと世界地図の間》 撮影：城戸保

近未来的な世界観に、「ドドドド……」といったオノマトペが駆使される作風で人気の漫画家、横山裕一の2013年発表の作品『世界地図の間』がまちなかの意外なところに……！ 写真は長者町・豊島ビル壁面だが、同作は他にも様々な場所に出現。『世界地図の間』で描かれる空想の都市の1コマ1コマが、現実の都市と重なり、都市に溶け込んだ。



横山裕一《世界地図の痛車》 モバイル・トリエンナーレ(東栄町)での展示風景

前述の横山は、トヨタ自動車のプリウスPHVを使用したラッピングカーでも街にインパクトを与えた。《世界地図の痛車》はモバイル・トリエンナーレでも大活躍。風景によってはアンバランスな雰囲気になり、それがまたおかしかったり……。もちろん、走行時の音が静かなハイブリッド車にラッピングされた相反するオノマトペが、走りのスピード感と一体になった時は最高！

ジャンルの融合

あいちトリエンナーレは第1回から“複合性”を意識して開催されてきた。今回、その最大規模となったのがオペラ『蝶々夫人』だろう。話題的なのは、大学で建築を専攻していた田尾下哲の演出。大学時代に「オペラ『蝶々夫人』における日本家屋の表象」と題した卒業論文を残した田尾下は、建築の視点も盛り込みながら、存分にその手腕を発揮した。障子を模した可動式のパネル、漆のように黒く輝く床、そこにアクセントを添える虹色のライン。日本の美学が凝縮したような舞台美術には、場面が変わる度、ため息が

漏れた。また、舞踊の振付に歌舞伎界から女形の市川笑三郎が参加。イタリア・オペラながら、日本を舞台にした作品を日本でプロデュースするにあたり、できうる限りの配慮をした結果、さらに異なるジャンルとのコラボレーションが実現した。それらの成果と、主演を務めたソプラノ歌手・安藤赴美子らの熱唱&熱演をもって、『蝶々夫人』は大喝采を受けることに。歌と劇、文字どおり両方が一体となった歌劇＝オペラとして、舞台芸術の粋を極めた。



あいちトリエンナーレ2013プロデュースオペラ『蝶々夫人』 撮影：中川幸作



やなぎみわ「ゼロ・アワー 東京ローズ最後のテーブル」 撮影：羽鳥直志

写真を中心に脚光を浴びてきた美術家・やなぎみわは、演劇の分野にも進出していることから、現代美術とパフォーマンス両部門に出品。演劇ではベケットの戯曲「クラブの最後のテーブル」に想を得て「ゼロ・アワー 東京ローズ最後のテーブル」を上演した。なお、装置デザインはトラフ建築設計事務所、音響デザインを作曲・思索ユニットのフォルマント兄弟が担当。さらに多彩な面々が関わった。



チェコに生まれ、欧州、特にオランダのネザーランド・ダンス・シアターでの活躍が名高い振付家イリ・キリアンが、世界初演となる作品「EAST SHADOW」を披露した。映像にアメリカの気鋭ジェイソン・アキラソンマ、ピアノ演奏に向井山朋子を迎えた、国境も越えるプロジェクト。親日家でもあるキリアンは東日本大震災を憂い、亡き人々の存在を悼むように、美しく優しい舞台を見せてくれた。

イリ・キリアン「EAST SHADOW」 撮影：羽鳥直志



SJQ++は、ピアノ、トロンボーン、ギター、ドラム、ベース、映像プログラマー、そして、メンバーが開発した人工生命 (!) で構成されたメディア・パフォーマンスグループ。彼らは即興演奏と映像がリアルタイムでシンクロするライブを展開。今回は名鉄協商パークキングをステージに、周囲のビルも生かしたパフォーマンスで沸かせた。

SJQ++ (arc) (ライブパフォーマンス)



ARICA+金氏徹平「しあわせな日々」 原作：サミュエル・ベケット 撮影：羽鳥直志

演出・美術家、詩人、俳優で構成されるARICAは、演劇やダンスの枠組を越え、音楽や建築、デザインなどとも呼応する舞台表現を行ってきた集団。彼らはベケットの戯曲「しあわせな日々」を上演するにあたり、美術家の金氏徹平とコラボレーションした。半身が山に埋まった老女の話には、金氏の作風を生かした“日用品の山”が出現！ビジュアルアートとしても観客を圧倒した。

アートを体感する



キッズトリエンナーレの様子

あいちトリエンナーレは、観るだけでなく、気軽に楽しくアートを体感する場もたくさん用意してきた。まだまだ馴染みのうすい現代アートも、思い切って内側に飛び込んでしまえば「何を躊躇していたのだろうか?」と思うほど。同時に、それらが決して遠くない問題を扱っていることにも気づかされる。

一方、子どもたちにとっては、古典の名画も現代美術の傑作も、同じアートに違いはないだろう。仲間とともに絵を描いたり、ダンスを踊ったり、先生からコツを教えるも

らうことだって、何でも夢中になって吸収できる。キッズトリエンナーレがいつも盛況なのは、子どもたちこそがいちばん純粋な表現欲求を持っているからかもしれない。

そして、大人にとっても自分の中の子どもの心を意識することができれば、人はいつまでも自然に「表現」することができるのではないだろうか。今回のトリエンナーレでは、学生や大人も様々な形で様々な場で、アートの体験を果たした。全身で体感したアートは、何より忘れがたい経験となるだろう。



岡本信治郎《ころがるさくら・東京大空襲》 学校団体鑑賞の様子

トリエンナーレキットを使って作品を鑑賞する子どもたち



オノ・ヨーコ《ウィッシュ・ツリー・フォー・アイチ》 願い事を木に結び子どもたち

世界で最も有名な日本人のひとり、オノ・ヨーコは5つのプロジェクトを展開。そのうち《ウィッシュ・ツリー》と《マイ・マミー・イズ・ビューティフル》は、願い事や自分の母親について書くことで、作品に参加できた。《ウィッシュ・ツリー》は、会場だけでなく愛知県内の小・中学校でも行い、多くの子どもたちが参加した。



ワークショップの様子

今回のキッズトリエンナーレにも現代美術、パフォーマンスなどそれぞれの分野で、国内外のアーティストが協力してくれた。その際、子どもたちの反応はビビッドで、見ているだけでも楽しい。どんな優れたアートにも、根底には自然な表現欲求があり、基本となる作業や動作がある。それらを共有すれば、誰もがアートにぐっと近づけるのだ。



アーティスト派遣の様子

いつもの教室でアーティストと出会う! あいちトリエンナーレでは、学校へのアーティスト派遣も積極的に行っている。みんなでアーティストの話に耳を傾け、制作などを体験してみるの、個人でワークショップに参加するのともまた違って楽しい。豊かな人間形成を目指し、教育現場に「生きたアート」を持ち込むことは、今後ますます不可欠となっていくはずだ。



モバイル・トリエンナーレの様子
穂の国とよはし芸術劇場での展示風景
彦坂尚嘉《復活の塔》 撮影:城戸保

旧東部小学校(東栄町)での展示風景
撮影:菊山義浩

今回は、移動型展示=モバイル・トリエンナーレを展開。主要会場以外にもアートが飛び出していった。例えば、彦坂尚嘉の《復活の塔》は、愛知芸術文化センターよりミニサイズになって豊橋の新劇場などを巡回した。同時に、学芸員も各地に赴いて鑑賞をサポート。ガイドとなり、アートの普及に努めた。

人の輪の広がり

“人の輪の広がり”は、前回に勝るとも劣らぬ勢いで拡大した。言うまでもなく、あいちトリエンナーレはアーティストや関係者だけで開催できるわけではない。会場案内や作品ガイドを務めるボランティア、額に汗してペロタクシーを走らせたスタッフ、展示会場として協力してくれた街および地域の

人々、そうした多くの人たちの力なくして国内最大級の国際芸術祭は運営できない。そして、もちろん好奇心をもって足を運ぶ観客があったからこそ、ひとつひとつのアートが実を結んだのだ。



彦坂尚嘉《復活の塔》ガイドツアーボランティア活動風景



会場間をつないだペロタクシーのスタッフ

広がり、街ごと波及!!

岡崎アート広報大臣
オカザえもん



ほほう堂「ほほう堂@おつかい」 撮影：羽鳥直志

リチャード・ウィルソン《レーン61》

ダンスデュオ・ほほう堂は、長者町を含む各所を踊りながら移動。その様子が、パブリックビューイングとして長者町の会場で流れた。途中、パブリックビューイング会場に、ほほう堂の二人がサプライズで登場すると、会場は一層の盛り上がりを見せた。

納屋橋では、世界を、そしてアートと建築を股にかけるリチャード・ウィルソンが新作を発表。かつてボウリング場だった地に想いをこめた《レーン61》は、ピンとレーンが場外に飛び出す仕掛けで、通行人も思わずビックリ。



オノ・ヨコ《生きる喜び》

「見た、見た」という人がいちばん多いであろうオノ・ヨコ《生きる喜び》。名鉄東岡崎駅にも巨大なメッセージが。しかし、駅ビル内かなと思って案内につけるのに時間が掛かった人も。キョロキョロするうち窓の向こうにドーンと!



マーロン・グリフィス《太陽のうた》

トリニダード・トバゴ出身のマーロン・グリフィスは、3.11以降の日本の再生と復活を思い、不死鳥の神話を題材とするパレード作品を発表。サポーターとともにマスクや衣装を作り上げ、パレード当日は公募で集まった市民らと名古屋の街を鮮やかに彩った。



プラスト・セオリー《私が残りの人生でやろうとしていること》

名古屋市美術館の南、若宮大通公園多目的広場にはプラスト・セオリーの大規模インスタレーションが出現。船を運ぶためにボランティア有志も多数参加した。ちなみに、鑑賞に必要なタブレット端末はNTTDコムから提供された。

メディアが追いかけたトリエンナーレ

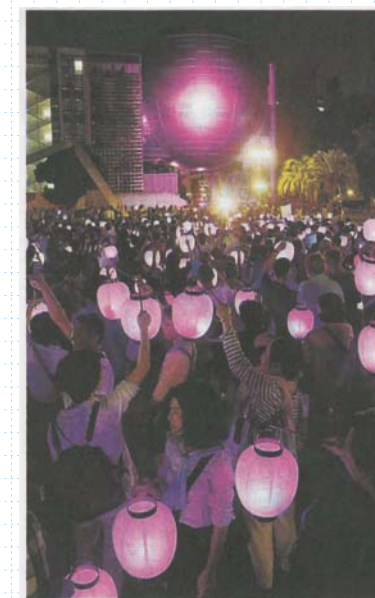


ペロタクシー出発
主要会場間を無料運行
国際芸術祭「あいちトリエンナーレ」が、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。あいちトリエンナーレは、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。あいちトリエンナーレは、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。

2013.7.29 毎日新聞

アートと希望と愛と
あいちトリエンナーレ開幕
あいちトリエンナーレが、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。あいちトリエンナーレは、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。

2013.8.11 中日新聞



千なり提灯 われらアート

名古屋市中心部を、色とりどりの提灯の行列で染めようという催しが21日夜、あった。開催中の「あいちトリエンナーレ2013」の企画で、22日もある。公募で集まった約800人が中区の白川公園で提灯を受け取った後、愛知芸術文化センターまでの約2kmを行列になって歩いた。提灯の中には受信機付きのLED照明があり、無線による制御で明かりを緑や青などに変化させた。

2013.9.22 朝日新聞

震災原発アートの挑む
あいちトリエンナーレ開幕
あいちトリエンナーレが、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。あいちトリエンナーレは、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。

2013.8.10 朝日新聞

日本発「蝶々夫人」
きょうと16日、県芸術劇場
あいちトリエンナーレが、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。あいちトリエンナーレは、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。

2013.9.14 毎日新聞

オカザえもんが「出発進行！」
あいちトリエンナーレ開幕
あいちトリエンナーレが、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。あいちトリエンナーレは、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。

2013.8.10 毎日新聞

子どもの人生を豊かに
あいちトリエンナーレ
あいちトリエンナーレが、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。あいちトリエンナーレは、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。

2013.9.10 中日新聞

「復活の塔」分身に対面
多くの震災被災者へ
あいちトリエンナーレが、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。あいちトリエンナーレは、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。

2013.10.4 福島民報

支えた1300人の善意
市民と芸術家共創
あいちトリエンナーレが、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。あいちトリエンナーレは、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。

2013.10.28 読売新聞

青いロールケーキ
あいちトリエンナーレ開幕
あいちトリエンナーレが、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。あいちトリエンナーレは、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。

2013.8.9 毎日新聞

アート夏へ飛び出せ
トリエンナーレ 伏見に展示1号
あいちトリエンナーレが、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。あいちトリエンナーレは、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。

2013.5.8 中日新聞

10日開幕へ準備着々
あいちトリエンナーレ開幕
あいちトリエンナーレが、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。あいちトリエンナーレは、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。

2013.8.6 中日新聞

60万人 アートに酔った
トリエンナーレきょう開幕
あいちトリエンナーレが、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。あいちトリエンナーレは、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。

2013.10.27 読売新聞

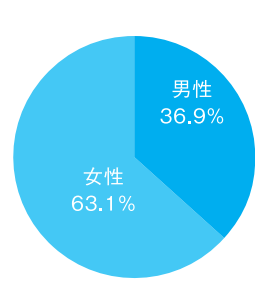
オカザえもんが「出発進行！」
あいちトリエンナーレ開幕
あいちトリエンナーレが、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。あいちトリエンナーレは、2013年9月27日、28日、29日の3日間、名古屋市中区で29日、兵庫県神戸市で27日、28日の2日間、開催された。

2013.8.9 毎日新聞

DATA

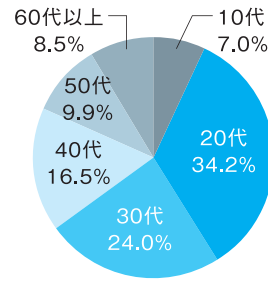
国際美術展への来場者の状況

来場者の男女比



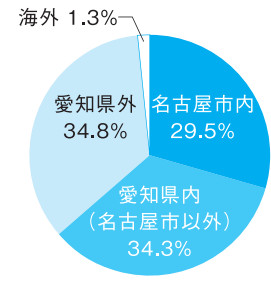
女性が63%
男女別では、女性が63.1%、男性が36.9%となっている。

年齢別来場者



30代以下が65%
子どもを除く来場者の年齢別では、10代~30代の若い世代が65.2%を占めている。

地域別来場者

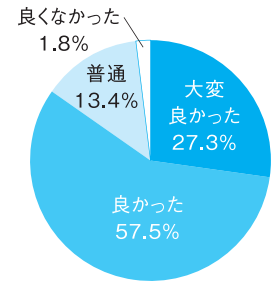


来場者の35%は県外から
来場者の地域別割合は、県外34.8%、名古屋市29.5%、名古屋市以外の県内34.3%。県外からは、ほぼ全都道府県からの来場があり、そのうちの約半数は、首都圏・京阪神からであった。



来場者アンケート結果

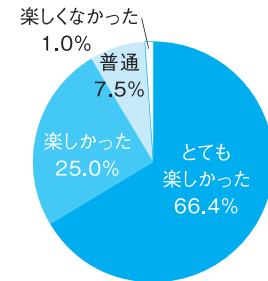
全体の感想



良かった85%
来場者の84.8%が「大変良かった」または「良かった」と回答。

子ども(小中学生)アンケート結果

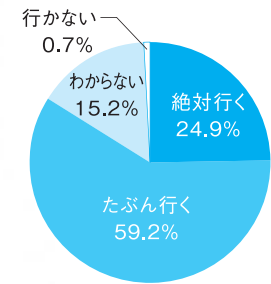
今日は楽しかったか



楽しかった91%
キッズトリエンナーレのプログラムに参加した子ども(小中学生)の91.4%が「とても楽しかった」または「楽しかった」と回答。



次回トリエンナーレに行きたいか



行きたい84%
来場者の84.1%が次回のトリエンナーレにも「絶対行く」または「たぶん行く」と回答。

数字で見るあいちトリエンナーレ2013

アーティスト数

122組

「揺れる大地—われわれはどこに立っているのか:場所、記憶、そして復活」をテーマに、34の国と地域から122組のアーティストが参加。最先端の現代美術、ダンスや演劇などのパフォーマンス、オペラを紹介した。

総来場者数

626,842人

総来場者数は、前回の57万2千人を5万4千人上回り、62万6千人にのぼった。

経済波及効果

約69億円

あいちトリエンナーレ2013の開催により、69億円の経済波及効果があったと考えられる。

パブリシティ効果

55億円以上

メディアに取り上げられた件数は、新聞731件、テレビ134件、ラジオ61件、雑誌等286件であった。これらのパブリシティ効果(広告費換算)は55億円以上と想定される。

来場者に占める中学生以下の割合

11.7%

国際美術展の主要7会場および「キッズトリエンナーレ」では、来場者に占める中学生以下の割合が11.7%であった。

展示面積

33,963㎡

展示面積は通常の愛知県美術館 企画展の展示スペースの10倍を超える33,963㎡を使用した。

1日の最多来場者数

26,541人

会期中で来場者が最も多かったのは、最終日の10月27日(日)で、26,541人の来場があった。(1日当たりの平均来場者数は7,935人)

ボランティア登録者数

1,310人

会場運営、ガイドツアーなどの業務に従事するボランティアの登録者数は1,310人。そのほかにも、アーティストの作品制作をサポートするボランティアに535人の登録があった。

キッズトリエンナーレ参加者数

60,803人

子どもたちがアートを体感できる「キッズトリエンナーレ」には家族での参加も含め60,803人の来場があった。

トリエンナーレを鑑賞した学校数

130校

学校行事等としてトリエンナーレを鑑賞したのは130校であり、多くの児童・生徒が芸術に触れる機会となった。

企業・団体・個人の支援件数

397件

企業・団体・個人から「協賛」、「協力」、「会場提供」、「有償広告掲載」の支援をいただいた件数は、397件にのぼった。

オフィシャルグッズ

225種類

公式デザイナーグッズ、アーティストグッズ、企業コラボグッズなど81品目225種類を作成し、オフィシャルショップ等で販売した。

公式ホームページへのアクセス数

576,249セッション

会期中には、100の国と地域から576,249件のアクセスがあった。
※Google Analyticsによるセッション(訪問)数

Twitterのフォロワー数

14,596人

公式アカウント「@Aichi_Triennale」のフォロワー数は、開幕時より増加し、最終日には14,596人にのぼった。

Facebookの合計リーチ数

最大27,101人

公式Facebook「AICHI TRIENNALE」に関連するコンテンツを見た人は、最も多かった日で27,101人にのぼった。